

支援センター名	佐用郡「ふるさと学舎」推進センター	
所在地	〒679-5301 兵庫県佐用郡佐用町佐用 2600-2 (佐用郡教育委員会内)	
連絡先	Tel 0790-82-2688 Fax 0790-82-0120 ホームページ http://www3.ocn.ne.jp/~sayokyoi/14furusato.htm	

事業の概要とポイント

- ①自然環境を題材／教材とした美術教育を展開したい、と地域の美術作家より相談を受け、佐用郡の小中学校の「学校支援」として働きかけ、児童生徒の表現活動の幅を広げた。
- ②兵庫県立人と自然の博物館（以下「ひとはく」）の移動博物館（キャラバン西播磨）を開催するにあたり、「ひとはく」より運営に関する相談を受けた。コーディネーターが実行委員会の組織編成の段階から地域リーダーを推薦するなど、地元連絡係として「ひとはく」と地域をつなぐ中継点となった。また展示作業における佐用郡の小中学校の「学校支援」として、展示品の作成及び見学解説会、自然体験活動などを開催した。展示作業を通じて地元で活動する自然団体を紹介し、相互連携を促進した。
- ③地域の自然活動団体より、活動内容や参加者が固定化している等の相談を受け、活動支援を行った。これまでは小学生が参加対象であったが、地元の高等学校農業科にも働きかけをした。地域との関係が途絶えがちな生徒が、地元の生産者や児童らと活動をともにすることで、学校での学習の目的強化、意欲の促進を図った。

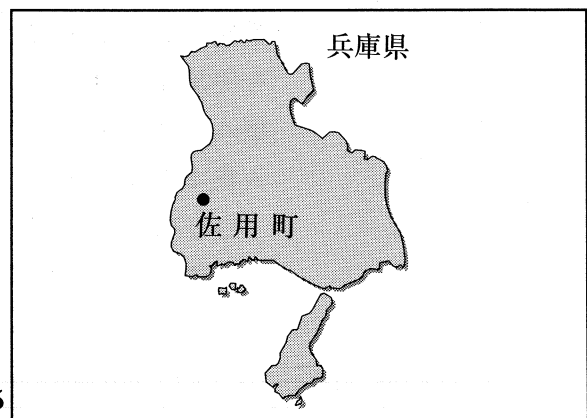
関係した学校・団体の名称

- ①佐用郡美術協会、佐用郡各小学校
(佐用、幕山、上月、久崎、中安、徳久、三河、三日月)
- ②兵庫県立人と自然の博物館、佐用郡各小中学校、兵庫県立佐用高等学校、
佐用町企画振興室、佐用町公民館、千種川生物研究会、千種川圏域清流づくり委員会、
上月田舎体験クラブ、佐用川のオオサンショウウオを守る会、田がめっこくらぶ、
佐用町エコフェスティバル実行委員会
- ③愛媛大学農学部、兵庫県立佐用高等学校、佐用町立江川小学校、田がめっこくらぶ

地域の現状・特色

活動対象地域の人口は、佐用町約 8,700 人、上月町約 5,700 人、南光町約 4,500 人、三日月町約 3,400 人である。

佐用郡は佐用町・上月町・南光町・三日月



町の4町で構成されており、兵庫県の中腹、最西端に位置する自然豊かな山間部で、主な産業は農業、林業である。豊かな自然を生かした町ぐるみ／郡域で青少年活動、子ども会活動が行われており、自然環境に対する関心が高い地域である。地域には自然体験を軸にした創作活動や、自然保護の見地から希少生物の保存に向けて取り組んでいる団体が発足し、活動が周知されつつある。

企画から活動までの経緯

- ① 3月10日 地域の美術作家より学校への“出前授業”について相談を受ける。
4月1日 各小中学校へ企画内容をFAXにて連絡し、希望を取りまとめる。
5月～ 希望のあった学校へ、指導者1名とコーディネーターが出向く。
(平成14年度は36回実施、8小学校、のべ32学級、784人が参加)
- ② 12月12日 「ひとはく」より「キャラバン西播磨」についての企画と地域実行委員会の組織について相談を受ける(以降、各者と必要な相談事務事業はメール／電話にてやりとりをする)。
4月24日 第1回実行委員会を開催(12団体、19名参加)。趣旨説明、実行委員長選出、事業計画説明、役割分担等を協議する。
5月7日 「ひとはく」担当者2名と共に郡内理科教科担当者会(10小学校12名)に出向き、事業の趣旨説明、参加協力を呼びかける。
5月10日 7日の理科教科担当者会をふまえ、FAXにて各小中学校に水生生物標本作り講座等の案内をし、希望等を取りまとめる。
5月13日 第2回実行委員会を開催する。事業の進め方、スケジュール確認、テーマ設定等を協議する。
5月23日 佐用郡校長会(4中学校、10小学校)で、事業の趣旨説明、参加協力を呼びかける。
6月12日 「ふるさと学舎」推進センター関係者が「ひとはく」に出向き、施設見学研修を行う。
6月19日 第3回実行委員会を開催する。広報・展示の進捗状況報告、搬入・搬出・イベント等のスケジュール／役割分担確認等を協議する。
7月1日 各広報機関に事業開催を広報する。(新聞掲載記事、有線放送、学校へのポスター・チラシ配布)
7月4・5日 希望のあった学校に「ひとはく」研究員1名と出向き、標本採集を実施する(5小学校、6学級、合計151人が参加)。
7月8・9日 標本採集を実施した学校に「ひとはく」研究員1名と出向き、封入標本を作成する。
7月11日 「ひとはく」研究員6名、「ふるさと学舎」推進センター関係者9名、佐用町公民館1名と会場設営し、各種団体と作品展示する。

- 7月13・14・15日 キャラバン西播磨の会場にて、希望校／学級に解説会を開催する。
(9小学校, 20学級, 合計431人が参加)
- 7月25日 「ひとはく」研究員6名と「ふるさと学舎」推進センター関係者9名, 佐用町公民館1名, 各種団体と会場撤収する。
- 8月5日 第4回実行委員会を開催する。事業成果報告, 反省・感想等意見交換等を協議する。
- ③ 7月27日 「田がめっこくらぶ」より, 今後の活動についての相談を受ける。
(以降, 各者と必要な相談事務事業はメール／電話にてやりとりをする)
- 8月5日 田がめっこくらぶ代表者と企画について協議する。
- 8月15日 各広報機関に事業開催を広報する。(新聞掲載記事, 有線放送, 学校へのポスター・チラシ配布)
- 8月25日 「田がめっこくらぶ」と共催し, 「タガメ捕獲大作戦!？」を実施する。
- 8月26日 参加関係者個別に意見を聞き, 今後の展開を協議した結果, ビオトープづくりの事業を展開することになる。
- 9月3日 兵庫県立佐用高等学校(以下「佐用高等学校」)に出向き, ビオトープづくりの趣旨説明と事業の参加協力をよびかける。
- 9月5日 活動対象地区にて江川小学校校長, 教員, PTA等関係者と会合をもち, 運営方法について協議する。
- 9月6日 各広報機関に事業開催を広報する。(新聞掲載記事, 有線放送, 学校へのポスター・チラシ配布)
- 9月22日 佐用高等学校生徒を交えた「ビオトープづくり」を実施する。
- 10月11日 佐用高等学校にて愛媛大学助教授の課外授業を開催し, JA西兵庫の広報誌の取材に資料提供する。
- 10月29日 県西播磨地域初任者研修会にて「里の自然観察会」の紹介をする。

事例の展開内容(特色など)

- ①学校での美術科の時間が削減されていることに危機感を感じている地域の美術作家より, 自然を素材にした題材で, 子どもたちの自由な感性を伸ばしたい, と相談を受け, 学校での出前授業を企画した。学校に事前に事業趣旨の説明にまわり, 年度始めに活動内容などの資料を各学校に配布した。多くの希望があり, 年々開催数は増加している。今までにない新しい創作表現や題材・素材・技法に, 子どもも教員も自由な絵画表現の楽しみを知った。今年度は3回シリーズで名画鑑賞をして, 作品をよみとる・言語表現するワークショップも取り入れ, 従来の出前授業から一歩進んだ取組も好評を博した。
- ②コーディネーターは以前から「ひとはく」より, 当地で「キャラバン西播磨」を開催したい, と相談を受けていた。「ひとはく」は「参画と協働」の趣旨から地域実行委員会

を組織したいと希望があったが、地域の実状を把握していなかったので、地域リーダーを紹介し、各種団体との交渉・連絡調整を行った。コーディネーター自身が学校への参入を希望して展示作品の制作を呼びかけ、「ひとはく」研究員と学校の連絡調整を行い、教員対象講座を開催したり作業のために学校に出向いて作業したりした。また、佐用郡及び佐用町の高齢者大学担当者にも交渉し、展示期間中に「ひとはく」研究員を講師に迎えて展示内容に即した講演を行った。こほのか、1学期末だったことで、各校の希望調査・日程を調整し、各学級単位での見学解説会も行った。さまざまな事業と関連づけて開催したため、入場者は3,100名を数え、人口比で考えると驚異的な数字を記録した。

- ③地域の小学生と保護者、農業生産者等地域で農業を通じた自然体験活動を行っている団体「田がめっこくらぶ」及び地元で調査研究を進めている愛媛大学とコーディネーターとの交流が密になり、「田がめっこくらぶ」が継続して開催している「里の自然観察会」を「ふるさと学舎」推進センターとの共催事業に、という話になった。学校関係者にも広く呼びかけたところ、新規の参加が多くあった。参加していた地元の高校農業科の教員が高校生に事業の参入を働きかけたところ、地域での体験事業として協働していくことになった。これまでの活動は地域での小規模な活動であったが、地元の小学校も総合的な学習の時間として位置づけたことで、大きな協力が得られた。参加者は広域であるが地域密着、地域主導の体制も整いつつある。

企画・活動する上でのポイント、留意点など（「うまくいったところ」、「むずかしかったところ」）

- ①開催季節と学年が重なるため、希望学校と指導者の日程調整、題材等が重ならないよう留意した。
- ②早い時期に学校や各種団体に活動趣旨を伝えていったが、新しい取組のためか、理解を得るのに時間がかかった。複数校の同時開催のため、学校間の日程調整に苦慮した。展示会場では学校向けの見学解説会を行った。展示標本作成に参加しなかった学校も足を運んだが、一同が身近な地域で採集された巨大封入標本に関心を強く抱いたようである。このほか、団体の活動紹介として展示した絶滅危惧種であるタガメの生き虫や、地元の小学生が参加した「田がめっこくらぶ」と大学の研究室が協力した研究内容には、同年代として大きな刺激を受けたようだ。
- ③活動人員が固定化し、団体そのものの体質が硬化しつつあったため、新しい参加者、組織との連携が団体の新陳代謝を促進した。従来のが地域でも広く周知され、地域ぐるみとしての取組にも移行しつつある。

評価

- ①地域で活動している美術作家たちと子どもたちの交流は相互にメリットがあった。指導することで自身の表現活動の幅を広げつつ深まり、各指導者が各種展覧会で上位入賞を

果たすようになった。また、指導を受けた子どもたちは美術活動に対する苦手意識が薄くなったり、表現の幅が広がったりしたため自由な作品が多く制作されている。回数を重ねるにつれ、教員が指導者任せにする姿勢が見られることもあった。教員の企画力・意識の向上を促進する働きかけが必要である。

②「ふるさと学舎」推進センターのコーディネートにより、地域で活動する団体・関係部局による実行委員会が組織され、ネットワーク化が実現した。学校の子どもたちの参画と協働により、展示作品に特別な意味が加わり、来場者の興味関心もまた一段と高まった。子どもたちは千種川の各支流の水生生物を採集し、流域地図上に配置する作業の中で(図1)、地域の自然環境を再確認・再発見する視点が得られた。教員は「自然環境の専門家・地域の団体を活用する」手立てを得たが、まだ自発的に活用するに至っていない。来年度は事業の協働運営に至るよう、関係者間の情報交換・相互連絡を図るような情報提供等が必要である。

③参加した高校生はビオトープづくり(図2)を通じた小学生や地域住民との交流の中で、机上や校内の実習でしか学び得なかった農業の意義、地域の実状を体感することが出来たであろうし、小学生と接する中で自分でも思わぬ自分の姿を発見したことだろう。小学生にとっては、親や教員等とはまた違う年長者に保護されるという親しい関係をもったことは楽しい体験であるし、自身の将来像にもよい影響を与え、相互にプラスの作用があったものと思われる。地域住民の中には高校生に対して日頃交流がなかったが、「(高校生は)意外に素直でよい子」と好印象をもったようで、参加者相互のメリットが大きい事業となった。また、そうした取り組みに各種機関・団体より新たな関係が形成されつつあり(図3)、今後の発展が期待される。

巨大な封入標本をつくる!

封入標本とは、透明のプラスチックの中に見たい生物の標本を押し込み、専用の封入剤の中に入れておくことで、長期保存が可能な標本のことです。また、生物の採集場所や採集日時、採集者の名前など、重要な情報を封入剤に記入することで、貴重な生物の標本が大切に扱われるようになります。

1) まず、お好みの道所の川で水生昆虫を採集する

2) 学校に持って来て、固く乾かすようにアルコールが入ったビンに入れて標本にします

3) 採集した生物の名前を調べて、封入標本にするものを選びます

4) 樹脂の中に固めます

5) 人と自然の博物館の移動展(7月12日-24日:佐用文化情報センター)で展示します。おんごんに来てください。

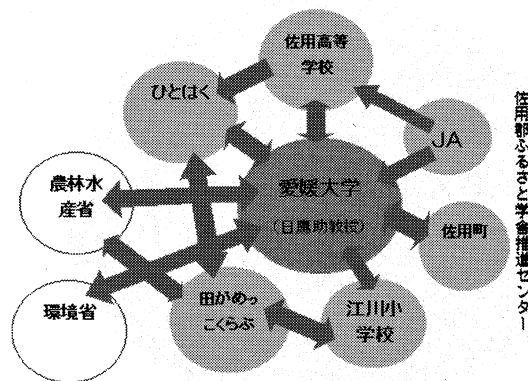
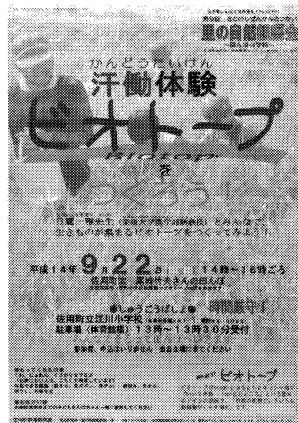


図1

「巨大な封入標本をつくる!」 「ビオトープをつくらう!」
資料作成: 兵庫県立人と自然の博物館職員

図2

ポスター

図3

佐用町某地区の自然環境ネットワーク